

第2回 世界で通用する英語

前回は、100年時代を豊かに生きるための価値あるスキルとしてビジネス英語は欠かせないというお話をしました。では、世界を相手に仕事をするには、どのような英語を身に付ければいいのでしょうか。

英語は世界の共通言語

グローバル化とICT（Information and Communication Technology 情報通信技術）の発展とともに、英語はリンガフランカ（lingua franca 世界の共通語）と見なされるようになりました。

「世界の英語」（World Englishes）という概念の登場によって、「ネイティブの英語が唯一正しい」という前提は過去のものとなり、「世界各国で話されている多種多様な英語は全て平等である」という考え方が受け入れられるようになりました。英語の話者は世界に約20億人いるといわれていますが、そのうちネイティブスピーカーは4億人強です。ノンネイティブの人口はネイティブの約4倍であることを考えると、母国語の影響からくる独特の発音や言い回しを多種多様な英語のひとつとして認めるという考え方は、時代の流れに沿ったものと言えるでしょう。

ジュネーブにある国際機関に勤める私の友人は「ここでは、アメリカン・イングリッシュはひとつの方言のようなもの」と言います。多種多様な英語が飛び交う国際機関ならではの肌感覚ですね。

ビジネスの軸足はアジア・アフリカへ

次に、ビジネスの視点から見ていきましょう。例えば、2017年自動車販売台数国別ランキング（出典：Global Note）を見ると、トップ5は、中国（2912万台）、米国（1758万台）、日本（523万台）、インド（401万台）、ドイツ（381万台）となっており、特にインドは今後の急成長が見込まれています。自動車会社がアメリカに加えて中国・インドを重視している理由が裏付けられます。

人口（2017年）を見ると、中国（13.9億人）、インド（13.4億人）、アメリカ（3.3億人）、インドネシア（2.6億人）、ブラジル（2.1億人）の順です（出典：世界銀行）。国連の予想によれば、2050年には、中国とインドが逆転し、ナイジェリアが4.1億人で3位に浮上、以下、米国、インドネシア、パキスタン、ブラジル、バングラデッシュ、コンゴ民主共和国、エチオピアと続きます。

アメリカや EU (European Union 欧州連合) は依然大きなマーケットですが、アジアは最重点市場、アフリカは最後に残された市場というのがグローバルビジネスの共通認識となっています。

plain English (わかりやすい英語)

アジア、アフリカを念頭に置くと、英語を母語としない人たちとのコミュニケーションが中心となります。そのため、ビジネスでは plain English (わかりやすい英語) を話すのが望ましいとされます。欧米のビジネスパーソンは Asian competence (アジア人と渡り合うためのスキル) を身に付けようと努力しており、英語のネイティブも、ノンネイティブにわかりやすい英語を話そうとします。あるイギリスの友人は、英語以外を母語とする参加者がいる会議では、まずノンネイティブがどのような英語を話すか見極めてから発言すると言います。ネイティブが高圧的に早口でまくし立てるのはマナー違反という時代がすぐそこまで来ているのです。

簡単な単語やフレーズを使うとネイティブから英語力が低いとみなされるのではないかと、という質問を受けることがあります。ここではっきり申し上げたいのは、plain English は「幼稚な英語」ではないということです。例えば、部員を前にして

Last but not least, I'd like to thank you all for your great effort.

大事なことを言い忘れていましたが、皆様のご尽力に感謝したいと思います。

とスピーチを締めたとしましょう。もし部員にノンネイティブがいた場合、last but not least (直訳：最後に述べるが決して重要度が低いわけではない) は理解されないかもしれません。代わりに **Finally**, I'd like to thank you... と言ってみてはどうでしょうか。この finally (最後に) は「わかりやすい英語」であって「幼稚な英語」ではありません。状況に応じてどうしたら相手に真意が伝わるかを考えることがポイントなのです。拙著『一流は、なぜシンプルな英語を話すのか』(青春出版社) では、そうしたコツについて解説しています。

国連などの国際機関に勤務する場合は、ネイティブと互角に渡り合えるハイレベルな英語力が問われます。また、外交の世界では、巧みな比喩とユーモアを交えながら相手の真意を聞き出す高度な話術が欠かせないと言います。しか

し、どんな世界であれ、難しいことをわかりやすく伝えることこそ一流の証であり、それが「世界に通用する英語」なのだと思います。